阡陵

No. 2

関西大学考古学等資料室彙報

昭和55年11月1日発行

石 枕（重要文化財）

目 次

玩物喪志 …… 2
西域の博物館 …… 3
神田孝平著「日本大古石器考」 …… 4
本山彦一翁と考古学 その1 …… 5
博物館実習ＡＢＣ …… 6
資料整理(南インド・スリランカの銅器) …… 7
東北縄文資料紹介(臥牛遺跡) …… 8
岩手県北上市更木町臥牛遺跡資料 …… 9
インカ・マヤと飛鳥の石造物 …… 10
資料室資料紹介 …… 11
編集後記 …… 12

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町３の３の35(06―388―1121)

玩　物　喪　志

横田健一

昭和12年4月，私が京都大学史学科に入学した時，考古学概説の担当は浜田青陵・耕作先生であった。先生は講義の中で，いくつか印象に残る言葉を吐かれたが，その中の一つに「物を集めるな。集めることに熱中すると，ほんとうの研究ができなくなる」と述べられた。

先生は，「もし蒐集するなら，大学や博物館でやればよい。個人ではやるな」ともいわれた。先生のおっしゃることは，中国の古典にいう「玩物喪志」であることが，後になって解った。

その古典とは『尚書』の「旅獒」篇に「玩人喪德，玩物喪志」とあるのを指している。

前号に書いたように，すぐれた美しい物をみることは楽しい。考古学や美術史のような学問は，学問をすること自体が楽しいといえる。しかし学問とは，その物について，いろいろな疑問を持ち，それを解決するために，その物を精密に観察，記録し，多くの類品を比較，分類し，起源，系統をたずね，その用途や機能，作者等を究明するなどの研究をすることである。そのためには，手許に多くの物を蒐集するのが，研究上に便宜であることはいうまでもない。しかし陥し穴は，蒐集欲の中にある。蒐集は研究の手段であるが，それが目的となると，危険である。

浜田青陵先生は，私達に一学期だけ講義して，総長に就任された。

その翌年の2月5日のことであった。医学部教授で形質人類学の大家K博士が，京大史学研究会で紙の歴史について研究発表をされた。K博士は病理学の教授で血液病理学の大家であり，生体染色で世界的業績があり，人類学でも日本原人研究の大家であった。考古学にも詳しく，文学部史学科でドイツ考古学書講読を兼担して居られた。その博士が紙の歴史について蘊蓄を傾けられたのであるから，人々は「さすが」と感嘆した。その講演の中で，博士は「私は日本のあらゆる年号の書かれた紙を蒐集している」と自慢されたことも，一驚させられた。

その後まもなく，K博士が洛西の名刹神護寺の国宝の経典，中尊寺経など数巻を盗んだ件で逮捕，送検されたことは，世上を驚倒させた。

青陵　浜田耕作先生

浜田総長は当時，病気で入院中であったが，青年時代以来の親友であり，管下の大学の教授であるK博士の犯罪，免職に心痛のあまり，病は重態となり，7月25日に逝去された。29日，大時計台下の大講堂で学葬が行われた。

非常に暑いうだるような日であった。私は葬儀に参列しながら，浜田先生が戒められた「玩物喪志」の教訓を，人もあろうに，先生の親友のK博士が破り，その心痛が，先生を死にいたらしめたことを，深く心に刻んだ。15年7月，長慶天皇に関する史料の捜索を，京大国史研究室が依嘱されて，近畿諸社寺の古文書を調査した。その時観心寺や大覚寺とともに，神護寺の古文書を泊りがけで調査した。その時，数巻の経典が桐箱にていねいに納めてあった。K博士が作らせた箱だった。2年前の思い出が鮮かによみがえって来た。

阡陵の由来

創刊の彙報に横田健一先生から「阡陵（せんりょう）」という題をいただいた。本学の学生が愛唱する逍遙歌の一節に「名も千陵の丈夫（ますらお）が」とあり，大学の所在地「千里山」に因んだものである。阡は数字であると共に「ミチ」「墓道」という意味もある。「陵」は「ヲカ」「ツカ」「ミササギ」であり，共に考古学に関連する。

資料室の彙報にふさわしい表題である。

西域の博物館

網　干　善　教

中国を訪れた人は，必ず博物館に案内される。私も数回の訪中ではあるが，北京の歴史博物館をはじめ，上海，遼寧，吉林，陝西などの省会の博物館を見学したことがある。

中国では省，県の行政単位で，それぞれ立派な博物館が設置されている。今年は冬と夏の２回にわたって西域地域，すなわちシルクロードの遺跡を見学してきた。もちろん見学したい出土文物の大半は，省や県の博物館に収められているから博物館へは是非赴かなければならない。２回の旅行中訪れた西域の博物館は，新疆ウイグル自治区，陝西省博物館，上海市博物館の省の博物館のほか，トルファン県，敦煌県，酒泉県などの県の博物館と遺跡博物館ともいうべき嘉峪関，茂陵，乾陵，秦陵，半坡博物館や，分類からいえば歴史博物館の一種である魯迅記念館などである。そこでこれらのうち，西域地方の博物館について若干紹介しておきたい。

新疆ウイグル自治区博物館　省会ウルムチの市内にある。中央にドーム形天井のホールがあり，右側の常設展示の歴史文物陳列室と左側の特別陳列室にわかれる。歴史文物陳列室ではトルファン出土の石核石器や羅布淖爾出土の細石器からはじまるが，特に唐代の文物にみるべきものがある。永元５年７月癸卯朔壬子の紀年のある羅布淖爾出土の木簡やジムサル北庭故城出土の「雕花蓮文方磚」や「禽獣菱花銅鏡」，アスターナ出土の貞観21年銘の「唐武悦墓誌」や「松心真」の墨，征県出土の海獣葡萄鏡のほか文書や経典など貴重なものが展示されている。

また，「新疆石窟寺壁画」の特別展が行われていた。模写ではあるが知見を広めることができた。

吐魯番県展覧館　トルファンの町にある博物館で，規模はあまり大きくはないが，交河，高昌故城，アスターナ古墓などのある地域で，さすがに見るべきものが多い。文書では延昌27年丁未歳６月の「通事令史」をはじめ延昌40年銘の「伝子友墓誌」，開元３年（715）在銘の「鎮墓獣」，その他アスターナ出土の小麦，栗，大豆などの貴重な展示品がある。

吐魯番県展覧館

新疆ウイグル自治区博物館

敦煌県文化館　敦煌にある博物館で３室からなり，336点の敦煌県出土文物が展示されていた。第１室は解放後に莫高窟より出土した文書や経典があった。なかでも「咸亨３年(672)２月21日経生王思謹写」とある『妙法蓮華経』巻第６は写経の様式を知る上で参考となった。第２室は漢から唐代に至る出土文物，漢代の鉄器や敦煌漢簡，敦煌協家堡第２号唐墓の構造などの展示が目についた。第３室は陽関や玉門関に関係のあるもので最近の出土文物，特に陽関出土の磚に立派なものがみられた。館長の李生甲先生や館員の方々と長時間にわたって話し合うことができたのは幸いであった。

酒泉県博物館　酒泉の市街にあり，規模はあまり大きくないが，展示品の内容がすばらしい。第１室から５室まであるが，第１室は新石器時代の遺物で，火焼沟出土の石刀，石鎌があり，第２室は西漢時代のものを展示する。1974年額済納旗出土の「居延漢簡」や東関墓群出土の銅鏡にすばらしいものがあった。第３室は魏晋代の出土文物で，石宿子出土の穿壁坊，第４室は酒泉県重点文物保護単位である「丁家閘五号壁画墓」の展示，第５室では磚画として知られる「崔家南湾第１号魏晋墓」の展示があった。

いずれの博物館もやはり西域でなければ見られないものの展示品が多く，学ぶところが多い。日本でもこうした地方の博物館の設置と充実が望まれる。

酒泉県博物館

神田孝平著『日本大古石器考』

角田芳昭

明治17年（1884年）神田孝平により，わが国初の英文による考古図譜が刊行された。その題名は『Notes on Ancient Stone Implements of Japan』で，石版図24図で石鏃，雷斧，石剣，石剣頭，曲玉……等を説明し，それぞれ形式，特徴，材質を説いている。そして図を除いて，翌々年の19年『日本大古石器考』として邦文のものを刊行した。彼はその緒言に次の如く書いている。

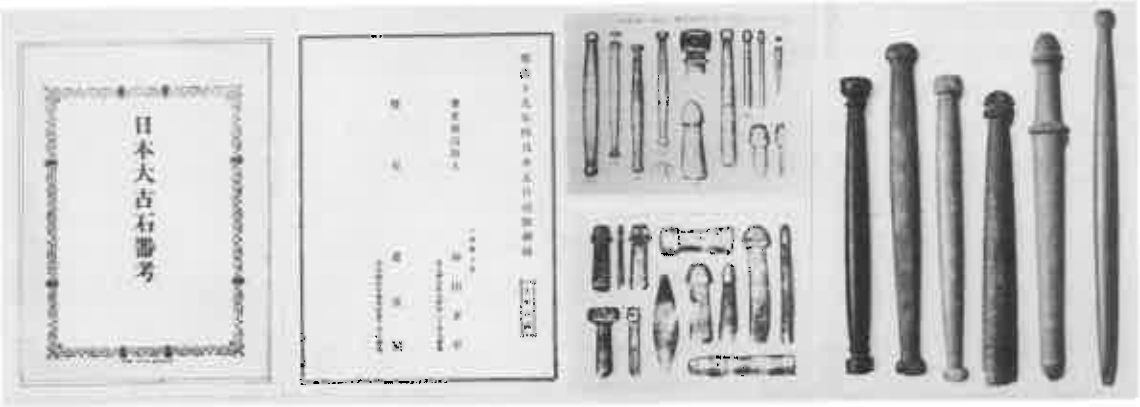
我ノ此書ヲ撰述スルノ主意ハ，我邦ノ古事ヲ講究セントスル外邦ノ諸学士ニ講究ノ材料ヲ供シ，而シテ其講究ノ結果ヲ聞カント欲スルニ在リ。我邦ノ古物ノ存スル者種類少シトセス，然ルニ今先石器ヨリ着手スル者ハ石器ヲ以テ最モ古クシテ最モ重要ナル者トスレバナリ，顧フニ外国ノ広キ其中ニハ，我邦ノ石器ト全ク同種ナル者ヲ存スル者アラン，或ハ大同少異ナル者アラン，或ハ我邦ニノミアリテ外邦ニ無キ者アラン，博ク外邦諸学士ノ論説ヲ聞キ参互比較シテ考察スルコトヲ得ハ，或ハ之ニ依テ我邦ノ載籍以前ニ溯リ其事蹟ヲ考定スルノ端緒ヲ得ルコトアラン，是則我最モ外邦諸学士ニ企望スル所ノ要旨ナリ，外邦諸学士モシ此点ニ付キ所見アラハ幸ニ論説ヲ咎ムコト勿レ。……我此書ヲ撰スル時所蔵ノ石器ヲ貸シ助力ヲ与ヘラレシハ松浦氏，柏木氏，小磯前氏，樋口氏，及ビ故人横山氏，蜷川氏，畠山氏ナリ，其他宮内省ノ御物二品アリ，図解ニ詳ニス，諸氏ノ蔵品ニ係ル者ハ図解ノ下ニ各其姓ノ一字ヲ記ス，其之ヲ記セサル者ハ総テ著者ノ収蔵ニ係ル。（句読点筆者）と書いており，石器の学問的解明に情熱を傾け，研究していこうとする態度が読みとれる。

彼は石器を３大別し，劈成類（打製石器）磨成類（磨製石器）古墳中発見品類となし，劈成類が最も古く，石鏃，石棒，天狗匙，分銅石などで，磨成類に属するものは雷斧，雷槌，石剣，石剣頭，曲玉，管玉等を以てすとし，古墳中発見品類が最も新しく，古墳中より出る石器は大別して２種類あり，その１つを精良品とし，曲玉，管玉，鍬形石，車輪石，鐶石等の類で，他の一種は葬儀品に属するものと，鉈石，手斧石，鑿石等で，埋葬の際粗石を以て仮造して葬儀を整えるのに用いたものであろうと推量している。

その他諸国の蒐集家で高名なるものは「大阪ノ蒹葭堂，大和ノ普賢院，近江の石亭，飛騨ノ長嘯亭，加賀ノ大聖寺候，越後ノ河倉等ナリシカ……武州ノ根岸氏，下野ノ釜伊氏等アリ，薩摩ノ白野氏，大阪ノ岡本氏及ヒ平瀬氏，和泉ノ池田氏，大和ノ中山氏，河内ノ多治見氏，陸中ノ橋本氏，三河屋氏等モ亦収蔵ノ称アリ」と記録している。

次に日本大古石器図解とし第１版の石鏃より24版の葬儀品までを小論にて解説している。奥付は明治十九年四月廿五日出版御届，著者兼出版人兵庫県士族神田孝平，発兌叢書閣となっている。

図版収録点数 271点であり，石鏃，石斧，勾玉と石製模造品が多くを占めている。この資料の中で10数点は東京人類学会雑誌に解説している。この資料のほとんどを本山彦一翁が受けつがれ，本山考古室へ入り，そして本学考古学資料室へと受けつがれている。この資料は，また，人類学会発足当時，若き青年学徒坪井正五郎など東京大学在学中の学生等に研究資料の対象となっていたことが当時の記録などを見ることにより解る。現在これら資料の整理を続行しており，いづれ白日のもとに学術資料として発刊したい所存である。



（日本考古学史資料集成Ⅱより）　（英文図版のもの）　（本学資料室資料）

本山彦一翁と考古学　その1

角　田　芳　昭

本学考古学資料室に所蔵する資料の大部分は元毎日新聞社長本山彦一翁の蒐集資料である。そこで今回は本山彦一翁の略歴と考古学趣味について『松陰本山彦一翁（毎日新聞社発行）』を参考とし記してみたい。

本山彦一翁は嘉永６年（1853）８月10日熊本市東子飼町に生まれた。松陰と号す。父は細川藩士本山四郎作，母はかの，３年後弟助作（後名を一箕と改む）生まれる。11才の時父死去する。慶応３年（1867）東皐塾を経て藩黌時習館へ入学し，御奉行所の詰小姓として出仕した。**明治**４年藩制改革につき，御小姓役被免されたのを期に東都遊学を志し，同５年箕作秋坪の三又学舎に入り学ぶ。英学に専心し，スミスの国富論などを勉学した。同７年11月より租税権頭の林正明の尽力により，租税寮13等出仕となり政府につかえる。また，この頃より福沢諭吉の門に出入する。

９年租税寮少属に任ぜらる。同12年２月兵庫県４等属勧業課附となり，翌13年３等属勧業学務課長となる。14年１月神戸師範学校及び模範中学校長兼務を命ぜらる。時に29才。15年大阪新報社に招かれ新聞人としてスタートする。翌年１月福沢諭吉に招かれ時事新報社に入社し総編輯（現在の整理部長にあたる）となる。17年会計局長となる。19年時事新報を退き，大阪財界の重鎮藤田伝三郎の藤田組の支配人に迎えらる。当時藤田組は鉱山業，農業経営に力を入れ，また，岡山県の児島湾干拓事業，山陽鉄道の敷設も計画しており，翁の藤田組入りには実に多大の期待が寄せられていた。

明治21年藤田伝三郎の令兄久原庄三郎の長女きく子を娶り藤田家の一族となる。翌年大阪毎日新聞社相談役として新聞事業経営にも尽力す。28年藤田組総支配人となり開墾，農林，鉱山等の各事業を総括する。36年11月（51才）大阪毎日新聞社長に就任，名実ともに新聞経営にたづさわることになる。以来大正，昭和と３世30年にわたり社長として，また，言論界，財界の指導者となる。昭和７年12月30日80才をもって逝去，法名を『光月院雪操松陰大居士』という。今日の大毎日の基礎を築いた人物として忘れてはならないが，文化事業等についても多くの業績を残しており，日本環海の海流調査，気象観測の施設建設，地震計の寄附など文化方面にも貢献した。

本山翁の考古趣味については，大正９年の手記に次の如く記している。「明治10年，米人モールス氏ガ，地質学教師トシテ，東京大学ニ聘セラレ横浜ニ上陸，汽車ニテ東京ニ入ル途中，大森周辺ニテ石器時代ノ遺跡アルヲ認メ其翌日実地ニ就イテ発掘シタルニ，果シテ貝塚アリ。土器石器モ発見シ，当時ノ新聞紙ニ掲ゲラル。余ハソンナコトガドウシテ解ルモノカト実ハ嘲リ居タル程ナリ。然レドモ余ハ其頃ヨリコレニ関スル趣味ヲ覚ユルニ至レリ。其後其発掘品ハ上野博物館ニ陳列セラレタルヲ実見シタリ」とあり，また，明治36年頃より人類学会員となり，遺跡視察などに関する記述がある。

松陰本山彦一翁（右）考古資料蒐集
〔松陰本山彦一翁（毎日新聞社）より〕

大正元年宮崎県西都原の古墳発掘調査の際にも現地におもむき，親しく発掘の模様を学者にたずねている。趣味としての考古学も，自ら発掘に参加して全ゆる知識を貪欲に吸収していった。大正６年（1917）大阪府藤井寺市国府遺跡第１回の発掘に始まり，同10年山口県長府における鋳銭址発掘，昭和４年肥前古陶窯発掘は翁の三大発掘として学史的にも著名なものである。これらの発掘資料が現在，本学に所蔵されており，その上神田孝平翁の石器類が加わり，学生及び利用者の資料となっている。これらの発掘資料と全国より蒐集された資料は一万数千点にのぼるが，この膨大な資料を翁に依頼され整理されたのが末永雅雄先生（本学名誉教授 学士院会員）で，昭和10年２月**『本山考古室要録』**として成ったのである。

次回は本山翁の三大発掘及び参考文献などについて述べたい。

博物館実習ＡＢＣ

小　野　勝　年

関大に博物館課程が設けられ，講義と実習をはじめてから，本年で20年目になる。最初の年度は博物館学の講義と実習を１ヵ年で速修した。講義はわたくしが担当し，実習は主として末永先生とで指導した。思い出しても冷汗を覚える次第であるが，どんな風にやったらよいか，見当も付かなかった。しかし，第１回生の中には大学院在学中の諸君が多かったし，自主的に勉強してくれ，そして，今日では彼等もそれぞれ，社会で中堅として活躍している。もちろん，それは博物館実習の賜物だとはいいきれないが，当座はまだ展示室も開放されておらず，不充分であったが，学生の意欲には好ましいものがあった。学年の終りには今日まで引続いている反省会も行い，きたんのない意見を述べたり，また報告書を提出させたりした。実習はぎこちないものではあったが，大学紛争の頃も休講することなく続けられた。自分は別に博物館に勤務するつもりはないが，大学で学ぶことのできた授業の中で，もっとも大学らしい勉強ができたといって，よろこんでくれた学生もあり，仲間のものたちも声涙共に下るスピーチであったなどと評したことも印象に残っている。在学中いろいろの博物館を見学でき，それだけでも楽しく有意義だったと卒直に語った女子学生もあった。

実習は博物館法の精神にのっとり，社会教育的施設としての博物館の学芸員といった人材養成が目的である。そして形式的には学芸員の資格をえる。形式と内容とは両々相俟たなければならないものであるものの，資格取得が主目的であると考えるものもないではない。だから，定まった課程を終えると，それで充分だというように考える。早く課程をすませて資格をとればその方が「とく」だという功利主義である。

人間は利害を計算する動物である。しかし，理想を懐いて，その実現を期する動物でもある。大学生と雖もその点は変りがない。欧米の学芸員実習は大学院程度の専門課程で行うとのことだが，経験がより多くなって，理解力が深くなっていくことがより適切だからであろう。しかし，より大切なことは実習には人間形成の場としての，謙虚な態度と意欲を要求したい。単なる技術的修練だけをねらうのではない。

博物館とは資料の収集，保管，展示，調査，研究と教育活動を行う施設である。しかし，その定義だけでは不充分であるので，先般の「公立博物館の設置運営の基準」では資料とは実物または，現象に関するものであると説明をしている。現象ということをつきつめてゆくと，ついには一般の視聴覚では把握できないものもふくまれる結果になるが，われわれの取扱うところのものは観察のできる具体的なものを出発点としている。

本学には考古資料の立派な展示室もあり，加うるに実習には多くの博物館見学や同所での実習ということも組み込まれているから，実習不足といったことはない。のみならず近年はアンケートだとか，展示の実施まで課し，１ヵ年の実習過程としてはむしろ荷が重すぎるとすら思うばかりである。

例年ガイダンスを行い，実習の手はじめとして陳列ケースの掃除を実施する。そのときは公然と資料を手にする機会にめぐまれるのであるから，観察を深める訓練は，先ずそうしたことからはじめることが肝要である。本年はたまたま青銅器のケースの中に仏像を線刻した湖州鏡が目にとまって，手にしている間に真ガンいずれかという疑問が起った。もしも，ケースの塵払いをしなかったら，そんな疑問も起らなかったであろう。昨年の実習の際，美術史年表の補訂を分担して行うことにした。１実習生はそのようなことは図書館で人名辞典をしらべればできることだといってゴウ然として実施を拒んだ。附属図書館にどのような辞典があり，そのうちでもっとも権威があるのはどれかと，質問しても答えられなかったし，自分の分担を果さないため，そこだけがぬけてしまって全体としての仕事が片付かないままにひき延ばされた。博物館は多方面の協力と関連の上に立っている。すべてに通ずることはできないとしても，大切なのは協同的姿勢である。そうしたことを体験的にきたえることも実習での必要性だといえる。最近は各地，あるいは博物館で扱う文化財の調査研究が進歩し，加うるに展示や美術品荷造輸送などの専門技術屋さんもできている。しかし，博物館実習ＡＢＣでのねらいは直ちに高等数学の世界に踏みこむことではなくて，加減乗除の算術から堅実にはじめることだと信じている。

資料整理（南インド・スリランカの銅器）

角山幸洋

いまわたしの手元に『久野氏と銅器付図鑑』という小冊子があり，そこには末永雅雄先生の監修，解説は藤井祐介，山田多恵子，写真は筆者で，昭和44年５月（非売）とある。内容は，三宝伸銅工業KK社長で，関大の評議員をもされていた久野晴雄氏の寄贈による銅器88点の図鑑で，巻頭に喚鐘のカラー写真を掲げ，以下すべての銅器に名称・法量と簡単な解説がつき，オフセット印刷されている。出版事情は，故久野晴雄氏の追悼文集に収録されていたものを，抜刷として別装釘されたもので，広い範囲には流布していない。考古学研究室へ寄贈されたいきさつは，その解説に明らかであるが，この解説を実務として担当した藤井君は鬼界に入り，また山田さんは退かれているので，ここでは原稿依頼をうけた「資料整理」の点からその一部を担当した当時のことを記しておきたい。それは関西大学通信第61号に「久野邦雄氏寄贈のアメリカ原住民使用の銅器約80点があり当時の生活を知る上に貴重なものである」とみえるからである。

その伝来のあらすじは，南インド，スリランカなどでつかわれていた銅器（真鍮をも含む）の生活容器が，銅原料の世界的高騰とともに素材として買い集められ，わが国へ輸入されたものであった。食生活に銅器を使用するのは，比較的加工・補修がしやすく，また銅自身に滅菌作用があるためで，資本主義的生産が生み出す大量の安価なアルミ製品は，経済性とからんで急速に置換されていった。ただ伝統を重んじる生活では，いまでも銅器の使用が盛んで，インドのホテルでは熱い把手をナプキンで包み，紅茶を運んでくるし，上級家庭では銀器とともに多くつかわれている。しかし総体的にみて銅からアルミの時代へ転換したとみてよいであろう。ところが遺物自体の調査となると不明なことが多く，藤井君は喚鐘に刻まれた文字の解読に馳けづり廻り，インド大使館でようやく読んでもらったという。解説担当の山田さんの話によると，水差と付称するものも，最近，旅行中に見聞した限りでは，トイレに使用されていたという。形態のわずかな違いでも，用途を異にするものがあり，常識的な判断だけでは誤りを招くことにもなろう。

南インドの喚鐘

最近，ある図録を作成する必要があり，世界の著名な博物館から写真をとり寄せたが，それには詳細なデータ（名称，法量，銘文の解読など）と公開履歴（掲載書，展示記録）がついてきた。また絵画などでは，クラックなどの損傷までを記録した履歴書が，保険などの関係もあるが，付けられているという。つまり資料整理から，調査研究，展示におよぶ個々の資料の履歴が蓄積されており，そして研究者に提供されるサービス機関が博物館組織に完備しているわけである。

そのためには展示にいたるまでの資料整理が大きな比重を占めるのであり，その成果が展示で問われることになろう。末永先生は，この序文に，「これを手がかりに研究を進めていただく足がかり」とされたいと述べておられるので，銅器図鑑の紹介をかね，資料整理の一端を述べた次第である。

東北縄文資料——岩手県北上市臥牛遺跡

本学資料室には東北地方出土の縄文遺跡資料を多数所蔵している。中でも岩手県北上市更木町臥牛遺跡出土の一括資料は貴重で，土偶１，土版１土笛形土製品１，土器30点（大洞BC式5，C_1式14，C_2式11）を所蔵している。

この遺跡は，北上市史第１巻（昭和43年）によると，大正末年に猿ヶ石川よりの用水路工事が行なわれた際，多数の土器，石器が出土して知られその一部は本山考古室に入り，現在は関西大学に保管されている……とあり，これと，土器に更木何号と墨書している点から考え，更木町臥牛遺跡出土遺物と断定してよい。この遺跡は縄文時代後・晩期の遺跡であり，猿ヶ石川左岸台地に立地し，加曽利B_2式に並行する土器等と，大洞B式からA式に至る土器が出土しているが，C_2式が主体をなしており，浅鉢，注口，壺形土器，その他多くの遺物が出土している。そこで，ここに若干紹介してみたい。

(1)は「土版」であり，長径 8.5cm，短径 7.3cmで，表面に渦巻文を入れ，裏面となっているところは蕨手文を左右に入れている。東北・関東地方において縄文晩期にはじめて出土する遺物であり護符として佩用，あるいは懸垂したものであろうと解釈されている。

(2)は土笛あるいは亀甲形土製品と呼ばれているもので，長径10cm，短径 7.8cmである。亀甲状の形をし，上部中央に１個の小貫孔があり，それを囲んで三角状に刻み目のある隆起帯を付し，二区に分け，左右に蕨手文と渦巻文を刻している。大洞C式土器に伴出したと考えられる。護符あるいは土笛として実際に使用していたのかも知れない。

(3)は「土偶」で，現行14.5cmあり，縄文時代晩期の遮光器土偶と呼ばれるものである。肩が水平にのび，眼は大きくなく全身を渦巻文で飾り，首はV字状の平行沈線に刻み目を入れ，隆帯に刺突文をつけた正中線で胴部を二区に分け，ところどころに彩色の痕跡がある。

(4)(5)(6)は大洞ＢＣ式に属する土器である。

(4)は高さ 8.0cm，口径 6.0cmの注口土器である。

(5)は高さ 9.0cm，口径 8.8cmの注口土器である。

(6)は高さ 6.5cm，口径 5.7cmの壺形土器である。(4)，(6)とも黒色光沢があり，一部は灰黒色を呈している。

(7)(8)は大洞C_1式土器である。(7)は高さ11.8cm，口径 8.2cm，胴部最大径13.3cmの壺形土器で器面には疑縄文の施文があり，口頸部はよく磨研されており墨色光沢がある。(8)は高さ12.8cm，口径11.4cm，胴部最大径11.5cmの壺形土器で，口縁部は波状口縁をなし，その下に３条の波状線を施しその下へ縄文がある。

(9)より(12)までは大洞C_2式土器であり，本遺跡の主体をなしている土器形式である。(9)は高さ10cm口径 7.1cm，胴部10.8cmの壺形土器で，肩から胴部にかけて２あるいは３線の沈線で10区劃され，下部に縄文をつける。(10)は高さ 9.6cm，口径 5.8cmの注口土器である。(11)は高さ 9.0cm，胴部10.2cmの壺形土器で，口縁部が欠損している。C_2になると体部文様の雲形文は直線的となり，Ａ式に盛行した工字文へ移行する過渡的な状態がみられる。(12)は高さ11.3cm，口径15.1cm，脚台の底径 8.7cmで口縁部は波状口縁をなし，その下に３条の沈線を施し，雲形文が主文となる。続いて２条の凹線をつけ，その下側に縄文をつける。以上本学資料を若干紹介したが，これが機縁となり一層これら遺跡に対する認識と学術調査が深まれば幸いである。

（角田芳昭）

大洞ＢＣ式　　大洞C_1式　　大洞C_2式

岩手県北上市更木町臥牛遺跡出土遺物

（大正末年猿ヶ石川よりの用水路工事の際，多数の土器，石器が出土し，その一部が本山彦一翁の蒐集に帰し，本学資料室へと受け継がれたものである。）

インカ・マヤと飛鳥の石造物

猪熊兼勝

昭和54年度文部省在外研究員として，昨年11月より本年１月末まで，ペルーを拠点にしながら，グアテマラ，メキシコ，ブラジルのラテンアメリカ諸国に滞在した。主とした目的は，インカ・マヤ文明の優れた石造物と日本古代の墳墓及び石造物とを比較研究するところにあった。

インカの遺跡の大部分は神殿，寺院，城塞と墳墓である。建物の壁は日乾煉瓦の土壁と石壁である。なかでも石造物は主として玄武岩，安山岩，花崗岩を使っている。ペルー北部のカハマルカ，中部のセロ・セチン，チャビン・デ・ワンタル，南部のマチュピチュのウルバンバ川において，黒色砂岩の塊が縞状に浮き出した花崗岩を見つけた。とくにセロ・セチンの神殿背後は，この岩盤の山で，神殿外壁の石組には首を切られ血が噴き出す顔のレリーフとなっている。この黒斑花崗岩こそ日本では飛鳥と河内飛鳥の一部に分布する古墳や石造物の石材と同質である。

石造物のうち造形的にも興味ある猿石と酷似した人物像石がワラス周辺に多数ある。飛鳥の猿石は二面石であるが，ワラス人物像石は男女を別石で彫っていた。飛鳥の酒舟石は宮殿の庭園に流れる饗宴用の導水施設である。マチュピチュの山頂から階段式に流れる導水用の溝を彫った車石や，ケンコの岩盤に彫られた蛇行する溝は酒舟石と同じ用途があったのであろう。

硬い岩石をどのようにして平滑にし，積あげたかという疑問はクスコで解明できた。インカの石工の手抜き工事や，荒仕上げの痕跡はないかと，崩れた石組の裏側ばかり探していると，タンブ・マチャイの滑らかな石組みのなかに縦溝を多く彫ったまま残している石壁があった。益田岩船は方眼状の溝を彫り，この溝を増やして平滑にするが，この石組みは一方向溝彫でうずめる手法であった。

モンテ・アルテ出土人物像石

ワラス出土人物像石

古都クスコは今もインカの遺跡の石壁がカフェやレストランの壁として，そのまま使われている。多角形や曲線の目地には隙間はなく，表面を盛あげる。阿部文殊院西古墳では墓室の壁面を滑らかにし，目地に粗面が組合う。平滑面の架構法の違いだけでインカと飛鳥の石工の技術には共通点が多い。

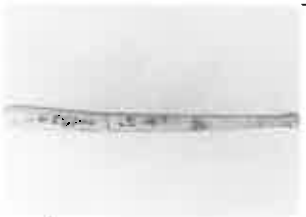
クスコ近くのオヤンタイタンボの宗教セントロの石材に石を運搬するテコ穴が残っていた。斑鳩の平野塚穴山古墳にあった同様の痕跡を思い出しながら，思わず心が躍った。

アンデスを北上し，セントロアメリカに入ると，そこはマヤ文明の勢力圏になる。グァテマラのメソアメリカのモンテ・アルテから出土した人物像は，メキシコのラベンダ出土の人頭石と違って全身像が多い。大きな太鼓腹をしたオルメカの手足のぎこちない作風は，どことなく飛鳥の猿石を彷彿させる。

メキシコのウシュマル，カバーなどの遺跡の寺院，宗教セントロの壁は乱石積みの骨組をフレスコで固定し，表面を玄武岩の加工石で積上げ，細部を漆喰で埋め込みながら，人物，ジャガー，飛蛇文で飾る。これらの石の半肉彫文様は接合部の目地を越えて連続するレリーフで，石壁を築造後に彫刻している。飛鳥の花山西古墳でも築造後に石の表面を整形した痕跡がある。もちろん，これらの石造物の共通技法を列挙して，飛鳥とインカマヤ文明とが影響しあったとは考えない。お互い地球の反対側で，石造物に対して偶然にも同じ発展過程をたどったのであろう。

資料紹介

骨　刀

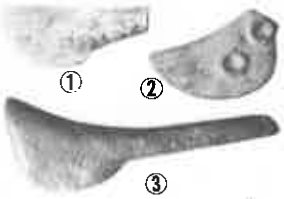


骨刀は石刀に似て一端に瘤状の頭部をつけた，断面扁円形の長大な骨器である。骨剣とも呼ばれる。主にクジラの骨で作られている。東北地方や北海道の貝塚よりわずかな発見例があり，縄文晩期の遺跡より出土する。

この骨刀は岩手県大船渡市細浦貝塚より，大正９年８月に発見されたもので，長さ39.3cm，刀渡 3.0cmで，背部に一条の細い溝を彫っている。晩期にはこれに類する石刀・石刀形石棒も存在し，実用の武器としても使用されていたのであろうが，頭部を装飾しているものについては，所有者の社会的地位の誇示，あるいは権威の象徴として首長者が所有していたものと考えられ，また，儀礼等においても使用されたものと思われる。

骨刀に関する研究は非常に少なく，骨角器の研究の一部として，あるいは古代武器の一部として研究されているに過ぎない。今後の研究の成果を待ちたい。

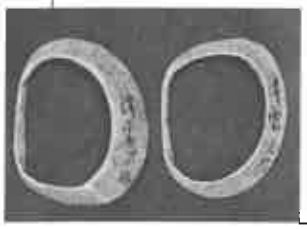
青龍刀形石器



この石器は扁平な半月形の体の一端がのびて棒状の柄になっており，中国の青龍刀に似ており，江戸時代に木内石亭が『雲根志』に青龍刀石と紹介しているのに始まり，現在もこの名で呼ばれている。縄文時代前期末から中期前半の円筒式土器の遺跡からの出土例があり，この時代のものと思われる。異形石器の一種である。(1)は変成岩質の軟い岩石を研磨し作ったもので，現長20.2cm，幅最高部 8.5cmである。(2)は神田孝平が淡崖迂夫の筆名で「津軽ノ好古家藤田氏ヨリ送ラレタル古物」とし東京人類学会雑誌第２巻第19号（明治20年）に報告している遺物。「日本大古石器考」には「青龍刀石ノ柄ヲ欠損セル者ナリ刃中ニ臍アリ，質ハ土塊石若シクハ板石ノ中ナルヘシ」と紹介し，青森県東津軽郡三厩村算用師官山の出土で，柄部を欠く現存部17.5cmである。(3)は「尚古図録」「日本大古石器考」にも図示せられているもので，安山岩質の石材を丹念に研磨し製作しており，幅最広部 9.5cm，現長35.0cmであり，出土地は不詳である。

貝　輪

この貝輪は大正８年12月長谷部言人氏が，岡山県笠岡市津雲貝塚より発掘された第３号人骨の前膊部左右に各１個づつ着装されていたものといわれている。左縦 7.1cm，横径 5.1cm，右縦 7.4cm，横径 6.0cm，縄文時代の各時期にみられ，弥生時代から古墳時代前期の遺跡にまで発見される。清野謙次氏が津雲貝塚人骨200余体中66例について調査した結果，貝輪を着装していたのは９例であり，その内８例が女性であった。右腕に７個，左腕に８個着装した例もある。貝輪の主な原料はベンケイガイ，フネガイ類，及びイタボガキなどであり，サルボウ，アカガイ，ヨメガカサ製のものもある。本例はハマグリ製であり比較的類例の少ないものである。縄文時代の社会で貝輪が単なる身体装飾品の一つであったか，呪術的意味をもっていたか，あるいは両腕一対が正常な着装ならば，着装後欠落しても補充しなかったことなどから，年令階級等に伴なう儀式ではない可能性もある。今後の研究成果がまたれる。



御物石器

御物石器は明治10年（1877）石川県鳳至郡穴水町比良出土の石器が献上されて帝室御物となったことから，この名がつけられた。ごもつ石器とも呼ばれる。また，枕石あるいは猪頭形石槌とも呼ばれていた。この用途は現在まで不明であるが，非実用的なものとされている。長さ22cm，幅10cm，厚さ11.2cmである。断面が長方形に近く，中央にくびれがあり，一端が突起状につくられたものと，断面がほぼ三角形を呈しくびれが一方に偏し，一端は切り落したようになっているものもある。分布は岐阜県に密集し富山県神通川流域がその半数を占めており，奈良，和歌山，岡山の各県からも出土例が知られ西日本の一部にも分布していることが明らかとなった。「日本大古石器考」に「能州鳳至郡比良村ノ法栄寺境内ノ土中ヨリ出タリ，明治10年大教正大谷光尊師之ヲ得テ献上セラレシ今ハ禁庫ニ納マレリ凡ソ古石器ノ完全ニシテ美麗ナルモノ恐ラクハ此２品ノ右ニ出ツル者ナカラン」と神田孝平が紹介している。

龍門石刻録拓本について

本学所蔵資料に中国河南省洛陽の「龍門石窟」の「石刻造像記」銘文拓本が約 750枚存在する。これも旧本山コレクションであるが，この度，文学部壷井義正教授に整理をお願いしていたが，完了して下さったので，そのリストを掲げておく。

古陽洞	136枚	火焼洞	48枚	薬方洞	55枚
魏字洞	86枚	敬善寺洞	99枚	万仏洞	54枚
老龍洞	109枚	小洞	71枚	蓮華洞	80枚
奉先寺洞	4枚	石窟洞	1枚	賓陽南洞	1枚
浄土洞	2枚				

以上のとおりであり，年号銘が存している最古のものは「古陽洞」の「北魏楊安族造釈迦像記」であり正始２年正月30日（505）銘のものである。他に正治２年より５年までのものが６点，永平元年（508）より永平５年までのもの13点が存する。いづれも釈迦・弥勒などの像記である。有名な露坐の大盧舎那仏（高宗大盧舎那仏像龕記）の拓本もあり，開元12年12月12日（722）（奉先寺洞）のものである。いづれ機会があれば内容も紹介したい。

◈ 資料貸出状況

55.9 石枕　１点（伝天理市柳本町出土）
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
「大和出土の国宝・重要文化財展」へ

55.9 藤井寺市国府遺跡出土品一括　19点
大阪市立博物館
「大阪の名宝展」へ

55.9 復原武具　１領
旺文社発行「日本歴史展望」第１巻 掲載

編集後記

阡陵創刊号より約６ヶ月，年２回発行予定の計画が実現した。紙面へ横田，網干，小野，角山，猪熊の諸先生方に玉稿をいただいた。ここに感謝申し上げる。記事についてはこの他に石器資料の大部分を占めている神田孝平翁蒐集の石器と「日本大古石器考」について記すとともに，本山彦一翁の略歴と業績を記した。資料紹介として岩手県北上市更木町臥牛遺跡の一括資料の中より若干を紹介した。多少でも学術研究資料の参考となれば幸いである。

現資料室の施設では今後の管理運営に支障を来すので，博物館設置を学長に要望したが，我々関係者が中心となり鋭意継続的に運動を展開しなければ前進はないと感じたので，今後はデータを集め強力に推進していく決意ですので，関係者の一層のバックアップをお願いしたい。

表紙に使用した『**石枕**』は元治元年（1864）６月11日，奈良県天理市渋谷から出土したものといわれ（東京人類学会報告第１巻８号），古くから景行天皇陵出土とする伝承がある。蛇紋岩製で長さ31.5cm，幅中央部31cm，重さ 20.86kgで遺骸の頭部を安置するもので，古墳時代の代表的資料とされ，重要文化財にも指定されている。今後も重要文化財指定資料を含む資料価値の高いものを表紙にとり上げていきたい。

（角田芳昭）

関西大学考古学等資料室彙報　**No. 2**　昭和55年11月１日発行
関西大学考古学等資料室　発行
㈱原多成文社　印刷